かみのやま歴史・文化財さんぽ

第１号（平成２９年９月）

国指定重要文化財

旧尾形家住宅

文じい「さあ、ついたぞ。」
ふみお「竹林があるぞ。」
ミドリ「すばらしい門もあるわ。」
あゆむ「インターホンがある。」
文じい「おしてごらん。
ほら、尾形さんがいらした。
尾形さん、おじゃまします。」
３　人「こんにちは。」
ふみお「うわあ、大きい家だね。」
文じい「昔、庄屋という村の代表をしていた農家で“旧尾形家住宅”と言っておる。」
ミドリ「屋根もすばらしいわ。」
文じい「茅葺き屋根だよ。3 年前に新しい茅で葺き替えしたばかりじゃ。」
あゆむ「ここが玄関なのかな。」
文じい「この正面の玄関は式台といって、お城の役人などえらい人が出入りするところで、私たちは向こうの入り口じゃよ。」
ふみお「家が曲がっているんだね。」
文じい「曲がり屋といってな、つき出た方は中門で厩があって、馬がかわれておった。」
あゆむ「へえ、馬といっしょなのかよ。」
文じい「馬は大事な家畜だったからのう。」
ミドリ「ふつうに入るときはここからね。」
文じい「そう大戸の口、半戸の口と言って、中門口は馬の出し入れ口で厩の口と言った。」
あゆむ「ふうん、これが馬のへやか。」

ふみお「文じい、ここの土は固いね。」
文じい「おお、いいところに気が付いた。ここは広い土間で“にわ”といっておるな。三和土という土に塩をまぜて固くしておる。いい感じじゃろう。」
あゆむ「なんだか、ここは林の中みたいだ。」
ミドリ「本当、柱が山の木のままだわ。」
文じい「これは漆の木で、そのままおいたようになっていて、これもいい感じじゃな。
栗やけやきなどの木もつかわれていて、大学の調査では、1600 年代の終わりごろに建てられたということじゃ。」
ミドリ「これはなんだか食事つくりの所みたい。」
文じい「その通り。竈というんじゃ。」
文じい「さあ、中に入ってみよう。」
ミドリ「うわあ、フカフカ！」
あゆむ「ワラだらけだね。」
文じい「たしかにワラやモミガラが下にしかれておるが、上にかぶせてあるのはワラで作ったゴザというものじゃ。」
ふみお「あったかそうだね。それに、これは“いろり”と言うんでしょう。」
文じい「おお、よく知っておるな。ここで火を起こ

していたんじゃ。」

ふみお「“よこざ”とか“かかざ”とかがあるんだよね。」

あゆむ「なに、それ。」

文じい「座る場所のことだな。」

ミドリ「うわあ、上を見るとすごい！屋根の内側が見える。」

文じい「釘は使わないで、材木をワラで結ぶだけでできておる。みごとなものじゃ。」

あゆむ「ところで、この戸のような、窓のようなものはなに？」

文じい「これは蔀戸と言ってな、持ち上げて、かぎにかけて開けておく戸じゃよ。」

ふみお「おもしろい。考えたね。」

あゆむ「この柱、特に太いね。」

ふみお「大黒柱とかいうんじゃない。」

文じい「いろいろ知っておるな。家の中心になる柱で、固くて長持ちする栗の木じゃ。」

ミドリ「部屋がいろいろあるわ。」

文じい「ここは、“なんど”。寝室じゃな。」

ミドリ「奥に、もっと部屋が続いているわ。」

あゆむ「いってみよう。」

文じい「まて、まて。どっこいしょと。」

ふみお「大丈夫？　高くなっているからね。」

ミドリ「奥はまた一段高くなっているわ。」

文じい「ここは、“中間”。この奥が座敷なんじゃが、“下座敷”、“中座敷”、“上座敷”とだんだん高くなっていく。」

ふみお「奥になるほど偉い人が座る感じだね。」

文じい「うむ、その通りじゃ。」

あゆむ「あれ、この写真は？」

ミドリ「あ、『小川の辺』の撮影をここでやったと書いてあるわ。」

文じい「この屋敷が昔のふんいきを実によく出しているからの。藤沢周平の作品じゃ。」

ふみお「尾形さんが、お客さまに説明している。」

あゆむ「なんだか調子がいいね。」

文じい「まさに名調子じゃな。尾形節じゃ。」

ミドリ「廊下もあるわ。」

文じい「“とおり”と言っておるな。この板戸などにもいろんな仕掛けがあるんじゃ。」

ミドリ「外の周りはどうなっているのかしら。」

あゆむ「見てみよう。」

文じい「表の庭が見事じゃな。池には生石大明神が祀られ、裏の垣根は“建仁寺垣”、大きい木はイチイで市の指定文化財になっておる。枯れないといいが。」

ふみお「本当にすごいお屋敷だね。」

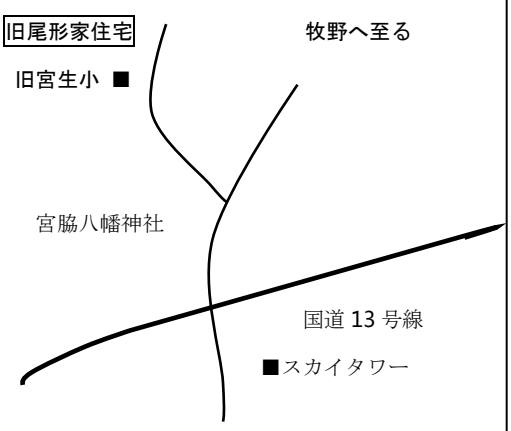
ミドリ「コンサートも行われると聞いたわ。また来てみたい。」

文じい「そうじゃな。どれ、それでは今日はこれぐらいで、そろそろおいとましようか。」

みんな「尾形さん、ありがとうございました。」

国指定重要文化財　「旧尾形家住宅」

上山市下生居１７０　６７３－３４７７



発行：　上山市教育委員会生涯学習課文化財・文化芸術係　　電話　023-672-1111（内線 314）